

幼 兒 の 心 理 的 發 達 (六)

東京家政大學教授 山 下 俊 郎

四、四歳兒の心理的發達 (つゞき)

(3) 情緒的發達

すべて情緒には消極的な面と積極的な面とがある。消極的な面というのは、最も單純な場合にはいわゆる不快といわれるものがそうであつて、いやなことを感じるときに起る。積極的な面というのは、いわゆる快といわれるものがそうであつて、氣持のよいものにぶつゝかつた時に起つて來る情緒がそれに當る。そしてそれ／＼の現われとして、いろ／＼な表情や行動が出て來るのであるが、まえに三歳兒の所で見たように、四歳兒の情緒についてもその現われの方面から見て行くことにしたいと思ふ。

いやなことがあつたとき、幼兒が泣くということとは三歳兒におけると同じように、四歳兒においても依然として見られる。すでに前に述べたように、この泣くということは、二歳

から三歳という風に年齢による發達にもなつて、だん／＼と少なくなつて來るのが一般的原则である。いろ／＼の情緒的經驗が、泣くこと以前にいろ／＼の表現を求めようになり、また情緒それ自體を自分のものとしておさえ統御して行くことが發達にもなつてだん／＼と出來るようになって來るからである。だから全體的に見れば、四歳兒は三歳兒にくらべて自分自身を抑えることが出來るようになって來るので、泣くことが大分少なくなるのがふつうであるといえる。しかし、これは三歳兒にくらべて、という程度の問題である。四歳兒はやはり幼兒であるから、まだ／＼泣きやすいのである。ことに、自分のほしきものが手に入らなかつたり、思うように行かなかつたりしたときや遊びにも氣に入つたものがなくなつてつまらなくなつたりすると、しく／＼と泣いていることがしばしば觀察されるのが普通である。

四歳兒は全體的に見て我が強いといえる。自分の作つたものやなんかを得意になつて見せびらかし、ふりまわすことを

よくする。そしてけんかもよくするし、他の子供たちに對して攻撃的である。ほかの子供をたたいたり、けつたり、ものを投げたりすることも度々あるし、また悪口をいつたり、悪たれをついたり、自慢したり、ほらをふいたりする傾向が強い。これは、しかし、まえに二歳児のところで見たと同様なかんしやくとは少しちがう。二歳児に見られるかんしやくといふのはいわば目あてのない、身體全體でまわりにぶつゝかつて行くような無目的あるいは無方向の情緒的な行動であるが、このようなかんしやくは四歳児には見られない。四歳児のは、いま右に見たような、直接まわりのものにぶつゝかつて行くという情緒的行動なのである。全體的に云つて、四歳児は情緒的には興奮的な時期だといえるので、おもちゃなどの扱い方が亂暴だつたり、他の子供を仲間からのけ者にするというような、荒つばい現われが見られるわけなのである。次に、情緒の中でも一つの大事な面である恐れについて觀察して見よう。恐怖心の發達からいうと四歳児の時期は一番恐怖心の強くなる時期であり、恐怖心の絶頂に達する年齢であるといわれている。四歳児には大人から考へてわけのわからない、理由のない恐怖心が多い。くちやみに對する恐怖心、動物に對する恐れ、皮膚の色がちがう外國人やしわの多い年よりに對する恐れというような視覚的なものに對する恐怖心は四歳児になるとますます強くなつてくる。そしてそのほか、眼立つことは、聽覺的な恐れ、すなわち音に對する恐怖心が強くなつて來ること、ことに消防自動車のサイレン

の音や、機械の音などに對する恐れは非常に強くなつて來ることが觀察される。また、母親がいなくなることに夜などひとりで置かれることを非常にこわがる。そして「こわい」という言葉を非常によくつかうようになり、そういつておいて今度はほんとにこわくなるという、いわゆる自己暗示にかゝる傾向が大變つよくなつて來るのが見られる。

幼兒たちのまわりの人間に對する社會的感情においても、四歳児は大分すゝんで來るのであるが、この面については、次の社會的發達のところで述べることにし、たゞこゝでは、自分より小さい子供たちをかあいがり、面倒を見るといふ氣持が少し頭をもたけ始めて來ると、いわゆる反抗期が終りに近づいて來るので、前に見たような私の強い傾向が一方にはあるけれども、おとなの權威や命令にしたがうという氣持もまた一方では少しずつ成長しつゝあるということを一言のべて置くに止めたいと思う。

#### (4) 社會的發達

社會的發達において、四歳児は一段とめざましい進歩をとける。

まづ、いちぢるしいのは基本的習慣の自立である。基本的習慣の意味については、いままで度々ふれて來たのでいまさらこゝにくり返すまでもないと思うのであるが、四歳児はこゝの習慣の自立のまさに完成される段階に在るのである。食事については、すでに三歳児の所でのべたように、四歳までの

間に完全にひとりです食事するようになり、これを助長し健康な習慣を作りあげることが一層必要になって来る。睡眠においても、ふつうに進んで来ていれば、健康なよい習慣が出来上つて居り、またまわりの人手をわずらわすことなくひとりですべてを處理して行けるようになってゐる。排便のことでも、おそくも四歳臺のうちには完全にひとりで用が足せるようになるはずである。着物を着ることについても、いろいろの着衣の行動について部分的には出来るようになってゐるが、四歳すぎると、ボタンをはめることもちゃんと出来るし、パンツやブルマースをはいたりぬいだりすることもやれるようになり、帽子をかぶることもきちんとする、靴下もはける、ひもも堅結びならむすべるといふようになって来るのがふつうである。そしてまた、清潔の習慣でも、はみがき、うがい、口ゆすぎ、鼻かみ、顔洗いと、一通りのことはすべて出来るようになるのが一般の標準である。このように見て来ると、いわゆる基本的習慣の大部分のことがらは、四歳すぎるとすべて一通り身につけられ、おおよそ自立の段階に達するものと考えられるのである。そして、この日常生活の中で、幼児が自分自身の生活を自分自身のものにするということとは、幼児をめぐるまわりの人々の社會生活の中で、確固とした生活の領域を持つということを意味し、このことは同時に幼児の自己というものが確立されることを意味するものであつて、このようにして確立された自己は社會生活の一つの單位として活動して行く大切な基礎をつくることになるのである。

ある。  
幼児が自分の周囲のひとりの間に展開する社會生活においても、四歳児はさらにいちぢるしい前進をする。まづ、四歳児は、三歳の頃からめざめて来たおともだちとの生活の中で自分をめぐる澤山のおともだちの中にいる自分のなかにいる自分——というものを強く意識するようになって来る。そこで、ほかの子供たちと協同に仲よく遊ぶようになるのであるが、幼児のこの年齢ではまわりの大人が手助けするのでなければ大體二——三人のグループを作るのがふつうである。しかし、四歳児は三歳児とちがつて非常に社會的になつて来る。おともだちと非常によくおしやべりをするようになる。おともだちとの社會生活がこのようにひらけて来ることはおともだちと仲よく遊ぶことである。しかしその一方で、また實によくけんかもする。これは一寸おかしく考えられるかも知れない。仲よく遊ぶようになればけんかとはなくなりそうなるものである。しかし、一體けんかというものは社會性がすんで来ればそれだけ多くなるのである。それは、けんかとは子供たちお互い同志の交渉が深くならなければ起つて来ないからである。もしお互いに何の交渉もないような間柄だつたらけんかなんか起りつこないはずである。けんかが起るといふのはそれだけお互いの交渉が密接だからであると考えられる。だからこの年齢になるとけんかが多いといふことになつて来るのである。ついでにけんかのことには少し

ふれて置く、このようにけんかが多いということは、子供たちの社會生活が密接であるということの意味するのだとは云つても、それはけんかを奨励するといふわけではない。それはけんかというのは決して望ましい社會生活の形ではないのであつて、それは何處までも社會性の發達の一つの段階として認められなければならないといふ意味において、けんかの發達段階における役割を認めるのである。したがつてわたくし達は、けんかが多いというのはこの年齢の一つの特徴ではあるけれども、これを發達の一つの階梯として認めるといふ態度をとると共に、このけんかを出來るだけふせいで、伸よく協力して行く生活をすゝめるように考へて行かなければならないと思ふのである。

四歳兒はまた實によくごつこ遊びをする。おまゝごと、お人形さんごつこ、電車ごつこというように、この年齢の幼兒はごつこ遊びが大好きである。ごつこ遊びは四歳から五歳のあいだに一番の絶頂に達するといわれている。このようにごつこ遊びが盛になつて來るといふことについては、二つの條件が考えられる。その第一は幼兒たちが自分のまわりにある社會のいろ／＼の生活に對して眼をひらいて來たということである。興味をもつて見まもつている社會生活がこの幼兒に成つて來る摸倣のはたらきをおして幼兒たちの心に入り込んで來るのである。第二には幼兒たちの心に非常にゆたかな想像の世界がひらけて來るといふことである。この年齢ごろにゆたかになつて來る想像の力は、幼兒の身のまわりにある

ものに、ごつこ遊びの世界に生きたものとしての生命を吹き込むのである。積木はごちそうになり、木の葉はお皿になる。お人形さんは生きた赤ちやんになるのである。このようにして幼兒たちに盛に遊ばれるごつこ遊びは、その遊びの中で幼兒たちの生活にとつて大切ないろ／＼の營み、わけてもおともだちと仲よく、めい／＼の役割をはたしながら生活して行く力をつけて行く意味を持つてゐるのである。ごつこ遊びはある意味においては幼兒たちに社會生活というものゝイロハを身につけさせてくれるものであるといつていいであらう。これを積極的に誘導し發展させて行くことは保育者の大切なつとめであると思ふ。

ごつこ遊びの中で、幼兒たちがめい／＼の役割をはたしながら遊ぶといふことを、いま右にのべたのであるが、遊びの中で定められた簡單なきまりは、この年齢では充分に守られるようになつてゐる。もちろん遊びのルールには色々複雑なものもあるが、簡單なものであつたら守れるのが普通である。こゝにも社會生活の勉強があることを保育者は考えよう

#### (5) 四歳兒の發達の特質

今迄いろ／＼見て來たように、四歳兒は色々の新しい世界を開いて行く年齢に當つてゐる。「發見する」Finding out子供だといつた外國の學者は、よくも名づけたものという氣がする。この新しい發見を一層價値の高いものにするのが、保育者の大切な務めであると考へられる。